子どもが自ら動く環境をつくる構造化支援

～学習と遊びを支える「TEACCH」の実践法～



R8.10.13

障がい児成長支援協会セミナー

合同会社サンクスシェア
代表社員・相談支援専門員　田中　さとる

なぜTEACCH？



・声かけ？

ある日の事業所で ― 「声かけ」の連鎖

職員は言います。子どもは動きません。また言い、また動かない。
よくある、あの一連のサイクル。

職員の声かけ

「次は 宿題 だよ」

「片付けて」

「座って」

「次は 手洗い だよ」

「もう終わりだよ」

子どもは動かない 👉

それでも動かないと

「さっき 言った よね」

「何回言ったら 分かる の?」

「ちゃんと 聞いて」

言葉は増えていく ―― 動きは生まれない

ここで一度立ち止まりたい。
声をかけ続ければ 動くのだろうか?

サンクスシェア

子どもが動かないのは、
次のどちらからでしょう?

A. 一般的な見方

『指示に 従わない』

「言うことを 聞いていない」
「わがままだ」「配慮が 足りない」

その時、職員は もっと強い言葉で
投げかけます。

B. TEACCH の見方

『何が どう いいか 分からない』

「何を・どこ・いつまで・次に何を…」
情報が 多すぎて 動けない のかもしれない

**構造化支援は、この 「*B* の可能性」 から
始まります。**

サンクスシェア

なぜTEACCH？



「言って動かす」から
「分かるから動ける」へ

指示の流れが まるごと 入れ替わる

BEFORE
従来型の サイクル

STEP 01
職員が指示

STEP 02
子どもが動く

STEP 03
動かなければ再度指示

言葉は増えるが、動きは生まれない。
職員のエネルギーが消耗・・・

言葉 → 言葉 の ループ

AFTER
構造化支援の サイクル

STEP 01
環境を 見る

STEP 02
「次」が分かる

STEP 03
自分から 動く

環境が 次 を 教えてくれる。
職員は 横に そっと いる だけに。

環境 → 行動 の ルート

サンクスシェア

例えば、職員が

「片付けて」 と言った時、
子どもは何が 分からない?

6 つの 不安が 隠れている

QUESTION 01
What **何を 片付ける?**
どの 玩具?

QUESTION 02
Where **どこに 入れる?**
棚? BOX?

QUESTION 03
How much **どれくらい?**
全部?

QUESTION 04
Order **どの 順番?**

QUESTION 05
Until **いつまで?**

QUESTION 06
And then **終わったら 次は?**

「できない」 の 前に **「分からない」** が 隠れていないか?

この 6 つを 埋めてあげるのが、構造化の ひとつの方向。

TEACCHとは



TEACCHとは？

TEACCH：「自閉症及び、それに準ずるコミュニケーション課題を抱える子ども向けのケアと教育」

「**T**reatment and **E**ducation of **A**utistic and related **C**ommunication-handicapped **CH**ildren」

- 1970年代にノースカロライナ大学で開発
- 自閉症スペクトラム（ASD）の支援プログラム
- 個々の特性を尊重し、構造化された環境を提供

サンクスシェア

TEACCHの基本方針・哲学

本当のTEACCH　内山登紀夫　学研

1　理論ではなく子どもの観察から自閉症の特質を理解する

2　保護者と専門家の協力

3　治癒ではなく子どもが自分らしく地域の中で生きて行けることがゴールである

4　正確なアセスメント（評価）

5　構造化された指導法の利用

6　認知理論と行動理論を重視する

7　スキルを伸ばすと同時に弱点を受け容れる

8　ホーリスティック（全体的）な見方を重視する

9　生涯にわたるコミュニティーに基礎を置いたサービス

TEACCHの基本方針・哲学

TEACCHとは何か？　腹巻智子　エンパワメント研究所

1　物理的環境の整理統合

2　予測性のある活動の手順

3　視覚的スケジュール

4　ルーティンと柔軟性

5　構造化されたワーク／活動システム

　① 内容　② 量や時間や期間　③ 終わり　④ 次の予定

6　視覚的に構造化された活動

　① 視覚的指示　② 視覚的整理統合化　③ 視覚的明瞭化

不適切行動がおこらない環境設定をする

「TEACCH」の一部

A	B（行動）	C（結果）
店でほしいものをみつける	「買って～」と大声で泣き叫ぶ	ほしいものが手に入る

レベルⅠ　『A』の状況を変える　「TEACCH」の一部

【３つのポイント】

レベルⅡ　『C』の結果を変える

レベルⅢ　『B』の行動を変える

① 代わりの行動をつくる

② 望ましい行動をつくる

“ABC分析　→　支援”　の考え方

サンクスシェア

構造化とは



構造化とは

6 つの 不安

QUESTION 01
What 何を?

QUESTION 02
Where どこに?

QUESTION 03
How much どれくらい？

QUESTION 04
Order どの 順番?

QUESTION 05
Until いつまで?

QUESTION 06
And then 終わったら 次は?

６つの不安を取り除くことを目的に、
「環境」「時間」「活動」をわかりやすく整えること・そして、伝えること

構造化の４つの要素

① 物理的構造化



「どこで何をするか」
空間で伝えること

② 時間の構造化



「次に何があるか」
見える形で伝えること

③ 活動の構造化



「何をどこまでやるか」
明確にして伝えること

④ 視覚の構造化



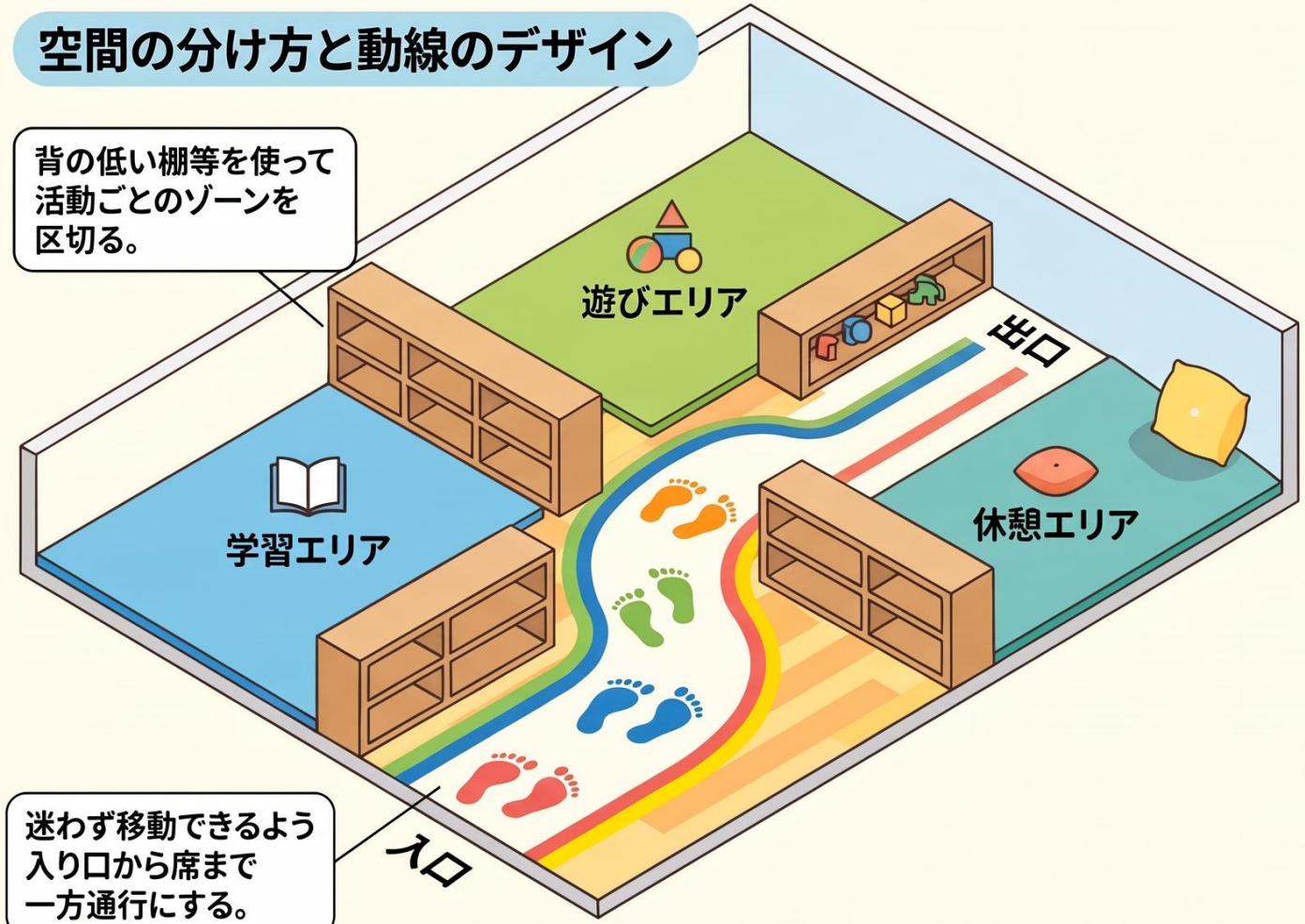
「情報を見て分かる形に」
絵・写真・色で伝える

サンクスシェア

空間で伝える「物理的構造化」の具体例ガイド

言葉の指示に頼るのではなく「どこで何をするか」を空間で分かりやすく伝える支援技法。
エリア分け、動線づくり、視覚的境界の3要素で、子どもが自分で理解して行動できる環境を整えます。

空間の分け方と動線のデザイン



視覚的境界と作業環境の整理



Gemini Note
サンクスシェア

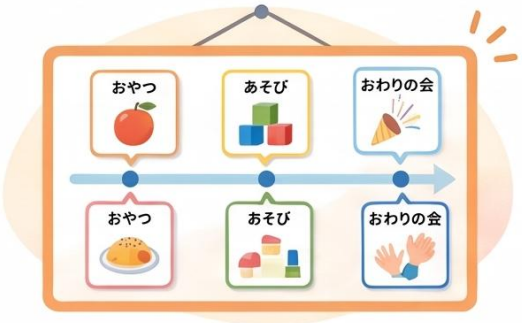
見通しの不安を解消する！「時間の構造化」実践ガイド

放課後等デイサービスや児童発達支援施設で働く支援員・保育士（福祉・教育分野の専門職）向け

なぜ「時間の構造化」が必要なのか？（目的と効果）



1日の流れを視覚的に



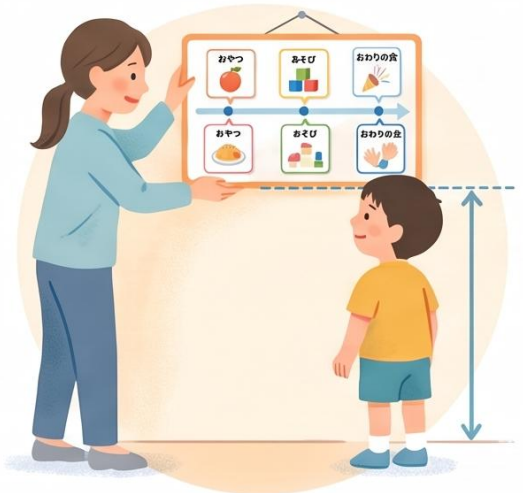
スケジュールボードやカード式予定表を使って、
全体の流れを目に見える形にします。



「次に何があるか」「いつ終わるか」が分かり、
安心して今の活動に集中できます。

現場で効果的に活用するためのポイント

子どもの「目線の高さ」に設置する



掲示位置が高すぎると見てもらえないため、
必ず子どもの目線に合わせて配置します。

予定表を確認して動く「習慣」を定着させる



ツールを作るだけでなく、子ども自身が自ら
確認して行動できるよう繰り返し促します。

Gemini Not
サンクスシェア

活動の構造化：ゴールの可視化で「終わり」を明確にする方法

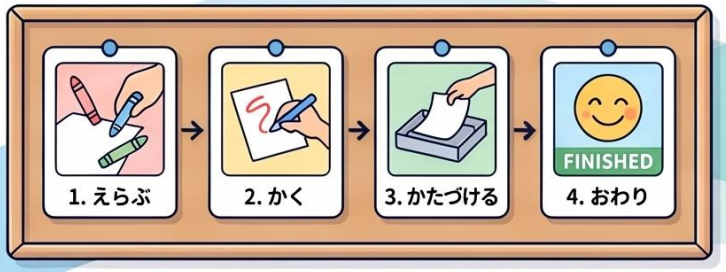
「活動の構造化」とは、子どもが「何をどこまでやれば終わりか」を明確にし、安心して活動に取り組める環境を整える支援手法です。
ツールや配置を工夫して活動のゴールを可視化することで、指示を繰り返さなくても自発的な行動を引き出すことができます。

活動のゴールを可視化する3つのツール



「やること」「おわった」ボックスの活用

左右に箱を並べ、教材の物理的な移動で終わりの感覚を視覚化します。



視覚的な「手順カード」の提示

絵や写真で作業手順を示し、文字が読めなくても
順序を理解できるようにします。



「チェックリスト」による完了の提示

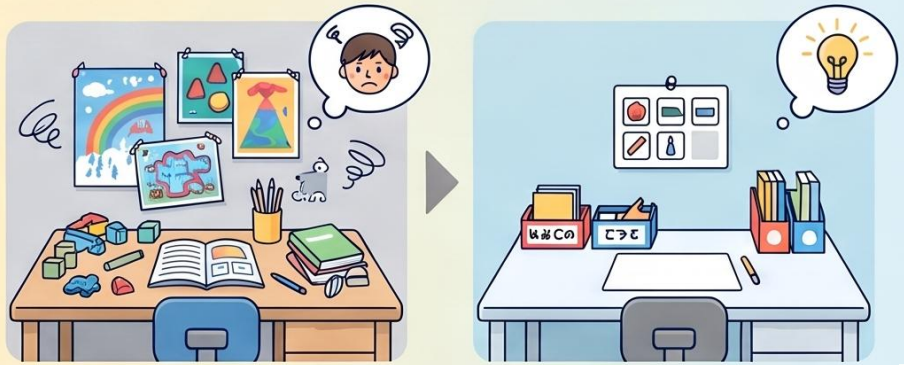
完了のチェックボックスや目印を設け、
終わりの見通しを持たせます。

ゴールが伝わる構造化教材の工夫



手順と終わりの明記

設問の区切りを明確にし、どこまでやれば選択できるかを一目で伝えます。



不要な刺激の削減と視覚化

余計な情報を限し、絵・写真・色・形を活用して直感的に理解させます。

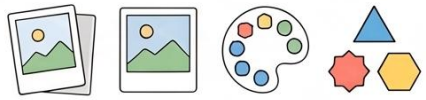
Gemini Not
サンクスシェア

直感的に伝わる！放課後等デイサービスの「視覚的構造化」と環境づくりのポイント

視覚的構造化で子どもが自分で見て理解し、主体的に動ける環境づくりを解説

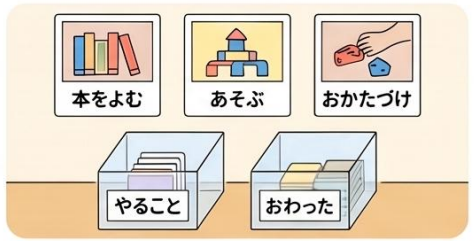
直感的に伝える視覚的構造化の工夫

絵・写真・色・形を使って「見て分かる」情報に変換



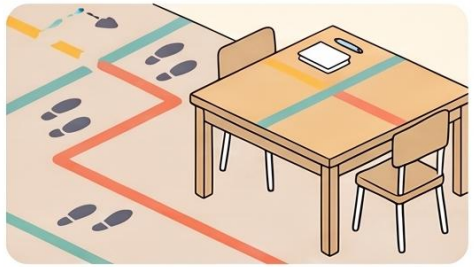
文字が読めない子どもでも、視覚情報があれば自分で行動を判断できます。

ラベル・手順カード・掲示物で活動と役割を明示



写真ラベルや「やること／おわった」箱を使い、ゴールや片付け先を示します。

テープやマークを活用して動線や境界線を可視化



床の足形マークや机のテープ区切りで、進む方向や物の置き場を伝えます。

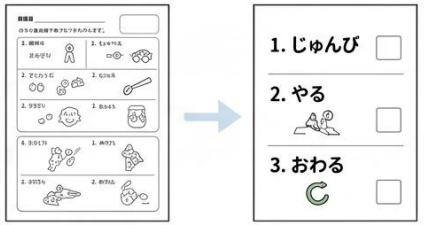
視覚的刺激のコントロールと環境の整え方

不要な視覚刺激を遮断して集中できる環境を作る



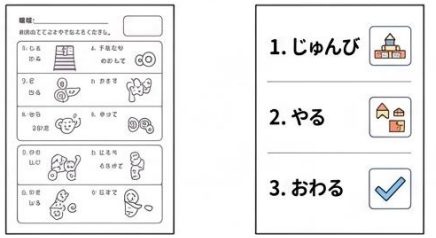
使わないおもちゃや教材に布をかけることで、余計な刺激を視界から外します。

教材の情報量を絞り手順やゴールを明記



不要な情報を削り、手順番号やチェックボックスを追加して隠潔にします。

教材の情報量を絞り手順やゴールを明記



不要な情報を削り、手順番号やチェックボックスを追加して簡潔にします。

子どもの目線と伝わりやすさに合わせてツールを調整



掲示の位置を低くし、絵や写真を用いて「子どもに意因が届く形」に整えます。

Gemini Not
サンクスシェア

【物理的構造化】「どこで何をするか」伝わっていますか？

～空間を区切り、行動のサインをつくる～

☐ エリア分けの明確化

学習コーナー・遊びコーナー・休憩コーナーなど、活動の目的ごとにスペースがはっきりと区別されているか？（「静」と「動」の分離）

☐ 一方向動線の確保

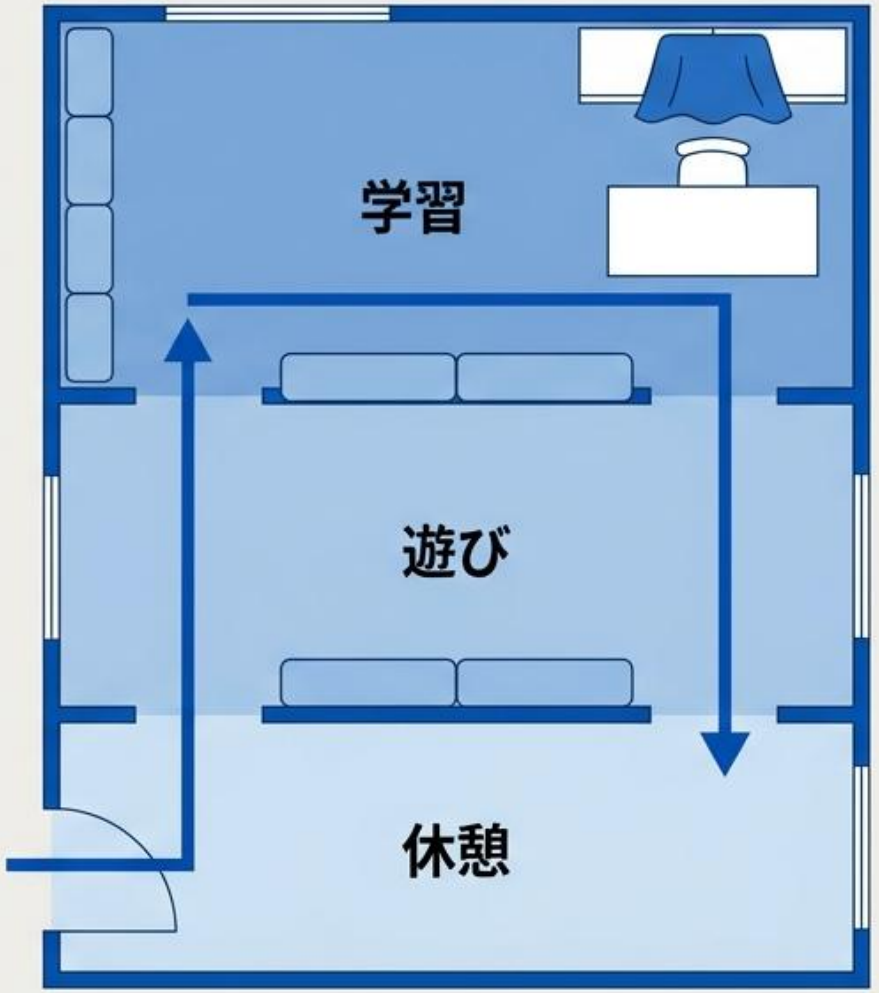
玄関から席まで、または活動の移動時に「迷い」が生じないよう、床のテープや足形マークで一方向の自然な流れが作られているか？

☐ 視覚的境界線の設置

空間の区切りが「大人の頭の中」だけでなく、子どもにも見える形（背の低い棚、カラーマット、机の上のテープ枠など）になっているか？

☐ 不要な刺激の遮断

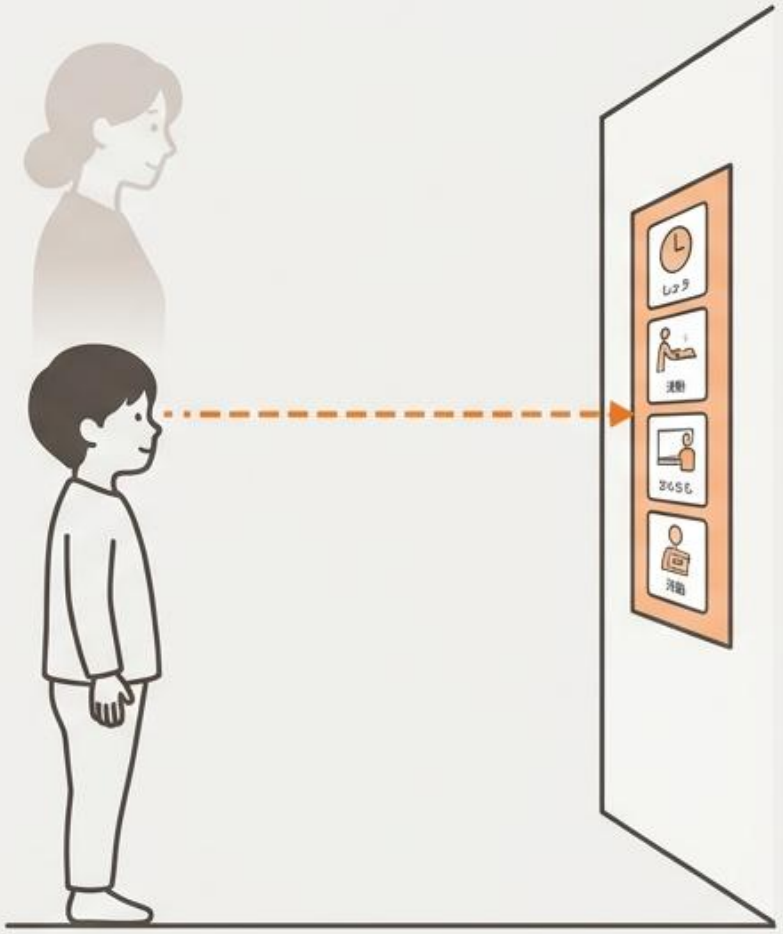
今使わないおもちゃや教材に布をかけるなど、子どもの視界から余計な情報（誘惑・ノイズ）を物理的に隠しているか？



Gemini Note
サンクスシェア

【時間的構造化】「次に何があるか」見えていますか？
～見通しの不安をなくし、今の活動に集中させる～

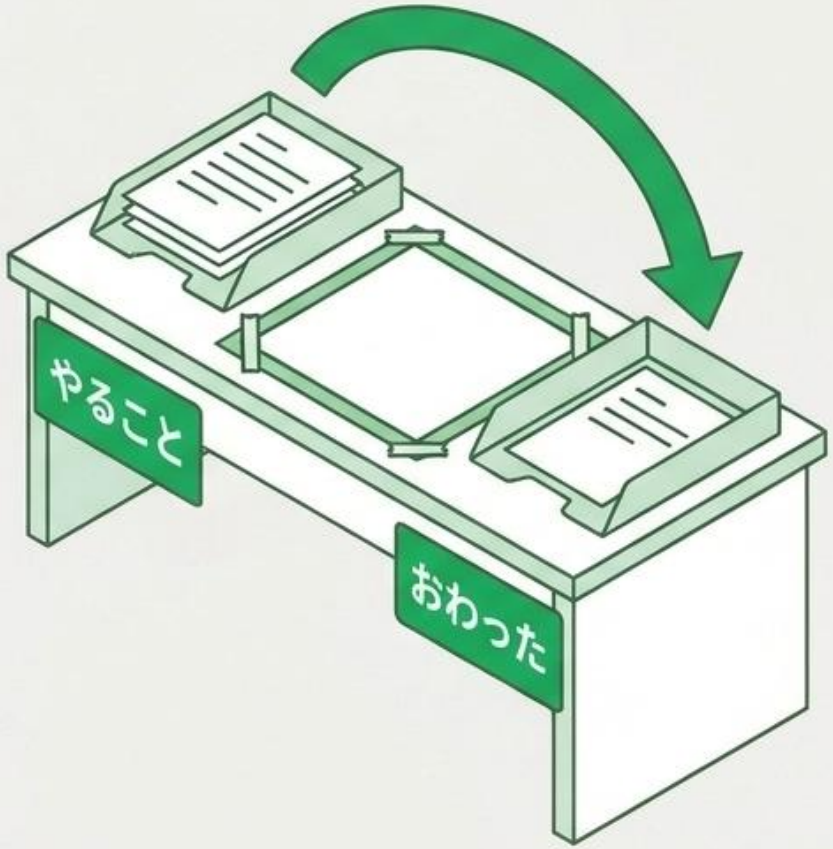
- ☐ **目線の高さへの設置（※最重要）**
  スケジュールボードは「大人の貼りやすい位置」ではなく、「子どもの目の高さ」に設置されているか？
- ☐ **活動の「終わり」と「次」の提示**
  「今は何をする時間か」「それが終わったら次は何か」が、カード式の予定表などで一目で確認できるようになっているか？
- ☐ **変化への事前対応**
  急な予定変更があった際、口頭での説明だけでなく、スケジュールボードのカードを差し替えるなど「見える形」で変更を伝えているか？
- ☐ **使う習慣の定着**
  ただ壁に貼ってあるだけでなく、活動の切り替えごとに子どもと一緒にボードを確認するルーティンが現場で定着しているか？



Gemini Note
サンクスシェア

【活動的構造化】「何をどこまでやるか」明確ですか？
～手順とゴールを視覚化し、達成感を引き出す～

- ☐ **手順のステップ化**
  活動や作業のプロセスが、子どもが一人で進められるレベルまで分解され、手順カードやチェックリストとして提示されているか？
- ☐ **ゴールの絶対的な明示**
  「どこまでやれば終わりか」が明確か？（例：タイマーの視覚化、教材の枚数の固定、終わりの目印の設置）
- ☐ **「やること」「おわった」の物理的配置**
  机の左側に「やること（未完了）」の箱、右側に「おわった（完了）」の箱を配置するなど、活動の進行度が物理的にわかる仕組みがあるか？
- ☐ **教材自体の構造化**
  提供している教材は、文字が少なく図が多いか？設問の区切りが明確で、どこに答えを書けばいいか直感的にわかるか？



Gemini Not
サンクスシェア

【視覚的構造化】「見て直感的にわかる」情報ですか？
～言葉に頼らず、子どもの「認知の枠組み」に合わせる～

- ☐ **絵・写真・色の直感的な活用**
  文字が読めない、または読めても意味の理解が苦手な子どものために、情報を「文字だけ」でなく、絵カード・写真・色分けに変換しているか？
- ☐ **ラベルと実物のリンク**
  おもちゃの片付け棚などのラベルは、子どもにとって小さすぎないか？ラベル（写真や絵）と実際のアイテムが完全に一致しているか？
- ☐ **情報量（過剰な刺激）のコントロール**
  掲示物や手順書に、不要な装飾や情報が含まれていないか？（大人の目線で「可愛いから」と追加したイラストが、逆にノイズになっていないか？）
- ☐ **「子ども目線」での最終確認**
  作成した視覚支援ツールは、作ることで満足せず「この子は本当に意味を理解できているか？」と、実際の反応を見て微調整を繰り返しているか？

Before
（改善前） ×



After
（改善後） ✓



Gemini Not
サンクスシェア

アセスメント



目的は「構造化」ではない

環境調整（構造化）のポイント

構造化は、**アセスメント**に応じて

- **環境調整（構造化）ありきではない**
- **できることのじゃまをしない**
- **「ひと」の優先順位を可能な範囲で下げる**
- **エンパワメントを意識する（＝自立）**

本来は
ひとりひとりに
合った環境・・・

サンクスシェア

アセスメントとは、単に情報収集することではく…

① できているか、できていないかを把握（２つの“D”）

② なぜ？の「背景」を探る（観察・情報収集）

③ 必要な支援を「見立て」る（行動分析）

③‘ どうやったらできるのか？を見つける
ex.　こちらから情報を投げかけ、反応を見る

障がいの２つの“D”

Disability

Learning Disability, LD



Disorder

Attention-deficit hyperactivity disorder、 ADHD



（アセスメント例）

- どう努力してもできない
- できる
- ときどきできる
- ときどきやる
- できるけどやらない
- できるけどやれない
- 手助けがあればできる
  （ひと・もの・こと）
- 一定期間トレーニング
  すればできる

『新たなできる』をつくる・『今あるできる』を増やす　の見極め

サンクスシェア

【情報源：アセスメントの方法】

- 観察（自然観察・仮説検証観察）
- 聞き取り（電話・対話）　他の場所・他の時間でどうか？
- 面接（本人や保護者、関係者からの情報収集）
- 質問紙法（アンケート）
- 検査法（学力検査　知能検査　性格検査　投影法
  人間関係検査　作業検査法　各種心理検査）
- ポートフォリオ（連絡帳　写真　創作作品　絵画　感想文など）

サンクスシェア

「もの」　・・・ものを使って環境そのものをコントロールする

例：壁向きに配置した机で学習する

「こと①」・・・活動内容やイベントのコントロール

例：　「今日のおやつコーナー」などスケジュールボードの提示をする

「こと②」・・・空間・場所のコントロール

例：学習やおやつの時間に座る席を指定する

「こと③」・・・時間帯や時間の長さ、順序などのコントロール

例：本人合わせた、時間入りのスケジュール表を準備する

「ひと」　・・・いわゆる誰が対応するか　人による対応の仕方

例：重要なルールをインプットしてほしい時、管理者に話をしてもらう

TEACCHによる家族支援



・対等な協働者

家族は『指導対象』ではなく『対等な協働者』 ― TEACCH家族支援の核心

TEACCHの基本理念：
家族は支援や指導の受容者ではなく、『本人の理解において最も深い知識を持つ専門家』

01

知見の相互融合

家族が持つ『本人の個別知識』と、専門職が持つ『自閉症の科学的知見』を対等に持ち寄り、最善の支援を協働して創り出す。

02

行動背景の解明

単なる問題行動として処罰するのではなく、自閉症特有の認知・視覚優位・学習特性と環境のミスマッチとして理解する。

03

家庭での自立とQOL

家庭内での構造化と実演コーチングを通じ、本人と家族全員の『生活の質（QOL）』を生涯にわたって高めていく。

専門職の『自閉症の知見』と家族の『本人の知識』を結集し、行動の背景を解明する

原則1：対等なパートナーシップ

■ 指導対象ではなく協働者
専門職が一方的に指導・指示するのではなく、対等な関係において意見を交換する。

■ 専門知識の補完関係
保護者の「我が子に関する最も詳しい歴史と知識」と専門職の「臨床的・客観的知見」を統合する。

■ 共通目標の自己決定
支援プランは専門側が押し付けるのではなく、家族との合意と自己決定のもとで策定。

原則2：自閉症特性からの行動理解

■ 『問題行動』の再定義
パニックや固執を「反抗やわがまま」ではなく、認知特性と環境の不一致として解釈。

■ 自閉症の認知・学習特性
視覚の優位性、手掛かりの限定、変化への抵抗感、感覚過敏などの特性を理解する。

■ 環境調整による予防
本人にとって「分からない不安」を取り除き、環境を整えることで混乱を未然に防止。

日常生活の見通しを立て、本人の自立と安心を支える『4つの視覚的構造化』

1. 物理的構造化 (Physical Structure)

「ここで何をするか」を明確に区分けする

・家具の配置やパーティションで境界を明確化
・刺激の多いテレビや玩具を視界から整理
・学習・食事・遊びの場所を視覚的に特定

2. スケジュール (Visual Schedule)

「いつ・何をするか」の見通しを提供する

・文字・写真・イラスト等本人の理解レベルで表示
・「上から下」「左から右」の流れで提示
・見通しがあることで自発的な行動と安心感を促進

3. ワークシステム (Work System)

「どれくらい・いつ終わるか」を示す

・「やるべき課題の量」「終了の合図」「次にすること」を明示
・大人に依存せず自分一人で完了できる達成感を育成
・家庭内のお手伝いや学習習慣に活用

4. 視覚的構造化 (Visual Structure)

「どうやってやるか」を課題自体に込める

・視覚的整理（整理整頓）
・視覚的明瞭化（明確な目印）
・視覚的指示（手順カードや実物サンプル）
・言葉の聞き逃しを防ぎ、手元の操作に集中できる

サンクスシェア

専門職のモデル実演と実践フィードバックにより、家庭での支援技術を段階的に育む

STEP 01
アセスメント & 目標共有

■ **家庭生活の現状把握**
保護者の困りごとやニーズ、日常のルーティンをヒアリング。

■ **子どもの強みと特性の把握**
テスト評価だけでなく家庭での観察を通じて得意なことを見出す。

■ **実現可能な目標策定**
家庭環境に合わせた具体的で小さな目標を設定。

STEP 02
モデル実演 & コーチング

■ **専門職による実演観察**
構造化されたアプローチ（FITTプログラム等）で専門職の関わりを提示。

■ **保護者による直接実践**
保護者が実際に子どもと関わり、その場ですぐにアドバイス。

■ **相互コミュニケーション**
成功したアプローチの要因を一緒に分析。

STEP 03
家庭定着 & 振り返り

■ **家庭環境への応用**
セッションで学んだ技術を家庭の家具やスケジュールに適用。

■ **継続的なフィードバック**
家庭での実践結果を、次回セッションで話し合い微調整。

■ **保護者の自己効力感向上**
「自分で支えられる」という確信と自信を育む。

サンクスシェア

個人の支援にとどまらず、家族全体の生活の質（QOL）を高め、生涯にわたり寄り添う

原則5：家族全体の生活の質（QOL）の尊重

■ 無理のない家庭目標の設定
専門側の「完璧な療育目標」を押し付けず、家庭のライフスタイルや余暇、食事の習慣に合わせた支援を選択。

■ きょうだい・保護者のストレス軽減
一人の支援が家族全体の過度な負担にならないよう考慮し、家庭内の精神的平穏とバランスを最優先。

■ 日常の喜びの共有
小さな成功を家族みんなで喜び合える環境をつくり、家庭生活そのものの充実感（QOL）向上を目指す。

原則6：生涯にわたる支援 (Across Lifespan)

■ 幼児期から成人期への継続性
発達段階に応じて生じる課題（就学、就職、自立生活等）の変化に合わせて継続して支援。

■ トランジション（移行期）の補強
学校から社会・就労への移行期における環境の変化を、一貫したアプローチと構造化でサポート。

■ 長期的パートナーシップ
一度限りの介入ではなく、ライフステージの折々で頼れる安心感と信頼関係を維持。

サンクスシェア

『指導・指導対象』から『協働・支援パートナー』への変換

比較軸	従来型の家族支援アプローチ	TEACCHの家族支援アプローチ
家族の位置づけ	指導や訓練を受ける受容者・対象	本人の知識を持つ対等な協働パートナー
行動への捉え方	問題行動の修正・消去・訓練	認知特性と環境の不一致（環境調整）
支援のゴール	一般的な行動様式への矯正	本人の自立 ＆ 家族全体のQOL向上
支援の期間	特定の課題発生時・一時的な点支援	生涯にわたるシームレスな面支援

サンクスシェア

TEACCH家族支援が目指すもの ― 家族とともに創る安心と豊かな生活

01 対等なパートナーシップ

家族と専門職が互いの知識を尊重し合う関係

02 特性に基づく行動理解

問題行動ではなく、自閉症特性からの環境調整

03 家庭における構造化

物理的環境・スケジュール等による自立促進

04 ペアレント・コーチング

実演とモデル提示による家庭での実践力向上

05 家族全体のQOL重視

理想論ではなく家庭全体の平穏と幸せを最優先

06 生涯にわたる連続支援

発達段階に応じた長期的な安心とサポート

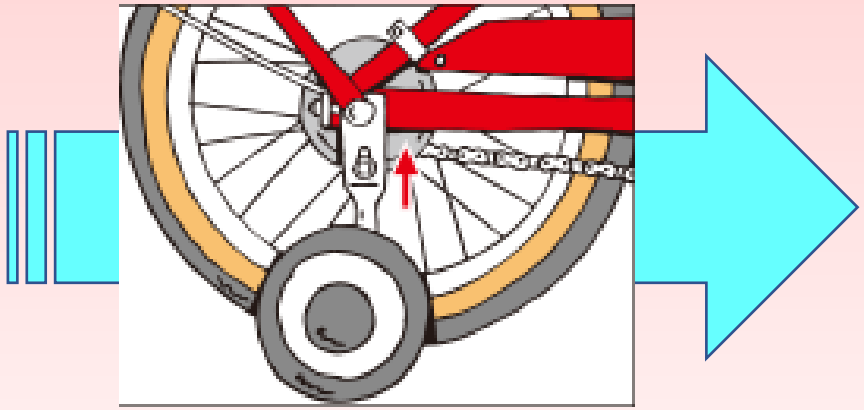
「支援する側・される側」を超え、本人の自立とご家族の笑顔を生涯にわたって共有し続ける。

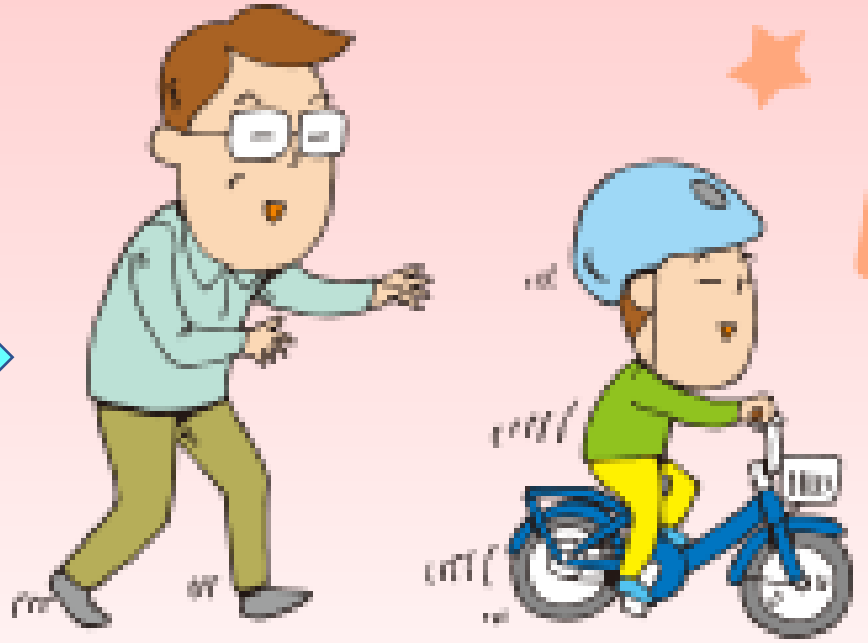
サンクスシェア

まとめ

サンクスシェア







支援 ＝ 補助輪つけ ➡ 補助輪はずし ➡ ひとりでできる

支援の「つく」と「はなれる」

手助けの量

5 つの 持ち帰り

01 **「動かない」ではなく 「分からないかもしれない」と 考える**
「指示に従わない」 と決めつけず、「分からない」可能性から 支援を 始める。

02 **言葉だけ に頼らず 「見て分かる」を つくる**
視覚支援は 絵カード だけ ではない。写真・実物・色・番号 などから 選ぶ。

03 **「何を・どれくらい・いつ終わる・次は何」を 明確にする**
ワークシステムの 4 つの 問い —— 研修全体で使う キーフレーズ。

04 **子どもに合わせて 構造化する**
全員に 同じ スケジュールを 当てこめない —— できる支援は 少しずつ へらす。

05 目標は 職員の指示に 従うこと ではなく
自分で 分かって、 自分で 動けること